

## 大賀壽吉のダンテ観と山川丙三郎の評価について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤井, 規晃 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/293">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/293</a>

# 大賀壽吉のダンテ観と山川丙三郎の評価について

赤井規晃

## 序

本報35号において、山川丙三郎（1876-1947）のダンテ翻訳事業を影で支えた大賀壽吉（1865-1937）の生涯を2つの伝記的文章に沿いながら、さまざまな文献に断片的に言及される情報を繋ぎ合わせて再構成することを試みた。その結果、大賀壽吉は、岡山教会の設立時に受洗した初期プロテスタント信者で、同志社英学校余科で大西祝や原田助とともに学んだ知識人であり、一平信徒として様々な活動を繰り広げ、実業界においても教界においても多大な功績を遺した人物であることがわかった。また、大賀のダンテ研究が薬種問屋の番頭の「道楽」<sup>1</sup>として片付けてしまえるものではないことも明らかとなった。そこで、本稿では大賀のダンテ論に目を向け、大賀がダンテという人物をどのように捉え、その文学的成果をどのように意味づけていたのか、またダンテを研究することの意義が大賀にとって何であったのかということに焦点を合わせ、大賀のダンテ研究について考察を進めてみたい。あわせて、大賀の山川訳に対する評価を取り上げ、今後の山川研究への足掛かりともしたい。

## 1. 大賀壽吉のダンテ研究

大賀壽吉のダンテ観を検討するにあたり、本稿では彼が新聞・雑誌等の出版物に発表した論文・講演記録・エッセイ等（以下、「ダンテ論」）と、山川丙三郎に宛てた手紙（木村1954, 1958, 1959, 1961, 1967）を資料として用いることとする。

---

<sup>1</sup> たとえば旭江文庫のことを矢野峰人は「大阪の紳商大賀壽吉氏生涯の道楽として蒐集したダンテ文庫」と言っている（矢野2007:242）。

大賀が遺したダンテに関する文献には、ダンテ論35編のほかに翻訳が14編ある（筆者調べ、別表を参照）。これらの文献は大正2年から昭和5年までの短期間に発表されており、特に大正4年から大正10年の時期に集中している。これは、大正4年がダンテの生誕650年、大正10年がダンテ没後600年にあたる記念すべき年で、前後も含めた大正時代はわが国でダンテにもっとも関心が向けられた時期となったことと深い関係がある。しかも、そのダンテ・ブームの中心にいたのが他ならぬ大賀壽吉であった。ダンテ論および翻訳の発表媒体は、『新人』『開拓者』『基督教世界』といったキリスト教ジャーナリズムの雑誌・新聞が主体である。後年になると『芸文』『The Muse』などの学術誌への寄稿も見られ、京都帝国大学文学部の教官（上田敏、新村出、浜田青陵ら）との交流の足跡がうかがわれるようになる。ちなみに、大賀は3種類の名義（大賀壽吉、大賀旭江、旭江漁史）を使って文章を書いているが、その使い分けには特に厳密な規則があるようには感じられない。

別表中のダンテ論35編中31編は、大賀自身が編纂したダンテ文献書誌目録*A Dante bibliography in Japan*（Oga 1929；改訂を加えたイタリア語版はOga 1930）にも記載があるが、4編（別表の1, 4, 20, 21）については同書中に掲載されていない（理由は不明）。また、35編の内5編の原文を筆者は未だ確認するに至っていないことを付言しておく。

以上が、大賀が文献として遺した業績の概要である。

## 2. 明治期ダンテ受容史概観

大賀のダンテ観を歴史的に位置づけるにあたり、明治期におけるダンテの受容史を振り返っておきたい。

『神曲』の翻訳者の一人でもある比較文学者平川祐弘によると、ダンテ受容の系譜には森鷗外、上田敏、夏目漱石らを代表とする「ダンテを詩人として芸術家として読むアプローチ」と内村鑑三、山川丙三郎、矢内原忠雄らを代表とする「『神曲』をキリスト教文学として恭しく読むアプローチ」の二つの系統がある（平川2010:22）。一方、島崎藤村学会会長も務めた比較

文学者剣持武彦は、ダンテ受容の経路として①マコーレイ著『ミルトン論』、②カーライル著『英雄崇拜論』、③ケアリー訳『神曲』、④森鷗外著『即興詩人』の4つの著作を挙げている（剣持1964:102-104）。以上を踏まえ、ここでは時系列を重視し、①ダンテについての知識の流入、②「英雄ダンテ」像の普及、③「詩人ダンテ」像の確立、の3期に分けて概括することにする。

ダンテの作品の翻訳が始まる明治30年代までは、ダンテに関する知識は西洋の哲学・思想・文学の著作を通じて間接的にもたらされた。その最初期のものが、明治10年に東京大学法理文三学部の英語訳読教材（副読本）として出版されたイギリスの詩人・歴史家トマス・バビントン・マコーレイ（1800-1859）の『ミルトン論』<sup>2</sup>である。これは、題名の通り『失楽園』*Paradise Lost*の著者ジョン・ミルトン（1608-1674）を論じたものであるが、マコーレイはミルトンの特徴を際立たせるために『神曲』の著者ダンテと対比する手法を取った。おそらくこの本が日本で初めて、偉大な「トスカナ文学の父」<sup>3</sup>ダンテとその『神曲』<sup>4</sup>という偉大な文学作品の存在を印刷物の形で知らしめたものであろう。

川戸は、この副読本が当時の東京大学法理文学部に所蔵されていた *Modern British Essayists, Vol. 4* を元に翻刻したものであると突き止め、しかも数あるマコーレイの評論のうちこの『ミルトン論』を教材に選定した人物を、前年にアメリカでの留学を終えて帰朝し開成学校の教授に着任した外山正一（1848-1900）としている（川戸1997）<sup>5</sup>。

この『ミルトン論』は間もなく東京大学以外の英学教授を行う諸学校でも教科書として採用されることとなり、明治17年頃からは出版元が一般書

<sup>2</sup> マコーレイが発表した2編目の評論で、文筆家としての名を一躍高めるきっかけとなった。“Milton”. *Edinburgh Review* 42 (August, 1825), pp. 325-334.

<sup>3</sup> “the father of Tuscan literature” (MaCaulay 1877:18).

<sup>4</sup> *Divine Comedy* を「神曲」と訳した最初の用例として森鷗外の『独逸日記』がしばしば引用されるが、後述のマコーレイ、カーライルの訳本や高橋五郎講注『英独詩文研鑽』（明治30年）では「ヂバインコメデー」「デビナコメデア」「神劇」などと訳されている。その後「神曲」が定訳となるのは、もちろん『即興詩人』の影響によるものである。

<sup>5</sup> 「法理文三学部の第一年生には、毎週二時間ずつ、英語英文を授けらるることであるが、その教科書としてはマコーレーの『ミルトン』…」(三上1908:26)。

店に移行し、広く普及していく（川戸1994）。さらには、①南荘漁史訳「麻鴻礼著 弥児頓論」『中央學術雑誌』36-47（明治19年）、②吉田直太郎訳『批評の鏡 弥児頓論』（富山房書店、明治20年6月）、③平井広五郎訳『弥爾敦論』（文港堂、明治23年7月）等の翻訳・注釈本も相次いで刊行され、結果的に明治10年代に英学教育を受けた知識人層には、この『ミルトン論』を媒介として、ダンテの名が着実に浸透していくことになる。

この『ミルトン論』から影響を受けた事例として二人の人物をあげておく。一人は坪内逍遙(1859-1935)である。彼が明治18年に著した『小説神髓』は、日本近代文学史上「小説」の誕生を告げる記念碑的著作として知らぬ者はいない。その主張の根幹となっているのは、文明の進歩とともに詩歌が衰退するが、詩歌は衰退しても小説は隆盛を極めるという考え方である。川戸(1997:85-86)によれば、その前提の部分はそもそもマコーレイに負うものであるという。

もう一人は詩人湯浅半月(1858-1943)の師山崎為徳(1857-1881)<sup>6</sup>である。明治10年8月に東京大学を中退し同志社英学校に転校、卒業後同校の教師を務めた山崎について湯浅は、「特にミルトンが好きで、パラダイスロストの長編を暗記して居て、朗吟しながらの散歩」をし、「最も優なるものはダビデ[、]ダンテー、ミルトンであると説いて、青年学生の極めて軟らかい心情を靈動した」(湯浅1926:1-2)と回想している。湯浅の記憶にある山崎がダンテとミルトンの名を並べているところから、おそらく山崎のダンテの知識も『ミルトン論』を経由したものと推察される。

このように、新しい知識人層に与えたマコーレイの『ミルトン論』の影響は決して小さくはない。とはいえ直接的にダンテの作品への関心と呼び覚ますまでには至らなかった。その意味で、マコーレイの『ミルトン論』は、明治期ダンテ受容史のプロローグと位置づけることができよう。

---

<sup>6</sup> なお、山崎為徳は明治14年11月9日に24歳でこの世を去るが、それと相前後して、大賀は岡山から上洛し同志社英学校余科の生徒となっている。状況からして二人が知り合うことはおそらく無かった。もし山崎が大賀にも薫陶を与えていたとしたら、その後の大賀は違った形でダンテ学者の道を歩むことになったかもしれない。

ダンテ受容の次の段階は、トマス・カーライル(1795-1881)の『英雄崇拜論』の翻訳と紹介である。明治20年代半ばに相次いで翻訳本が刊行され<sup>7</sup>、一種の人生指南の書として当時の青年に受け入れられた。カーライルは、世界史は英雄たちの歴史であるという英雄史観に立ち、「神」「預言者」「詩人」「牧師」「文人」「帝王」に分け、個々の英雄の果たした役割を分析している。その「詩人」としての「英雄」に挙げられているのが、ダンテとシェークスピアであった。ちょうど同じ頃、戸川安宅「詩聖ダンテ」(『三籟』8号、明治26年、百合園主人名義)や柏井園「ダンテの地獄」(『日本評論』、明治27年)らがダンテについてのまとまった評論を初めて著しているのも、カーライルの『英雄崇拜論』に触発されたものである。

カーライル紹介の中心人物は、日本基督一致教会の牧師で、教育・評論の方面で活躍していた植村正久(1857-1925)である。植村はカーライルが亡くなった直後の明治14年2月に、早くも「カーラエル氏略伝」(『六合雑誌』5号)、同年9月に「詩論一斑」(『六合雑誌』12号)を執筆し、積極的にカーライルの思想の紹介に取り組んでいる。植村の盟友で共に明治女学校の創設発起人に名を連ねる巖本善治(1863-1942)も同誌上において折に触れカーライルに言及しているという(川戸1995)。実際、植村のダンテへの言及も先の戸川、柏井より早く、「実際と理想」(『日本評論』14号、明治23年9月27日付)<sup>8</sup>や「文学上の理想に付きて一言す」(『日本評論』42号、明治25年4月25日付)<sup>9</sup>といった評論に見ることができる。これらは植村がカーライルの熱心な読者であったことを証するものである。

---

<sup>7</sup> 詳細は以下の通り。①石田羊一郎、大屋八十八郎訳『英雄崇拜論』(丸善、明治26年)、ただし「第3章 詩人としての英雄 ダンテ、セエクスピア」は未訳、②蘭山居士訳『詩人的英雄』(吉岡書店、明治27年、第3章のみの抜粋訳)、③住谷天来訳『英雄崇拜論』(警醒社、明治27年)、④中村古峽訳『英雄崇拜論』(日月社、明治27年、簡訳)、⑤土井晩翠訳『英雄論』(春陽堂、明治31年)。

<sup>8</sup> 「ダンテのインフェルノウ(地獄篇)は、書中の人物悪なるもの多きにも関わらず、読者をして、楽園の清潔を冀亡せしむること最も説なり」(植村1966:34)。

<sup>9</sup> 「ダンテが冥府(インフェルノウ)の歌を誦し、その列記せる奸悪の徒に接するの筆法は、春秋よりも厳正なるを得ん」(植村1966:55)。

ここで重要なのは、カーライルの『英雄崇拜論』が、ダンテの伝記的側面に注目を集める役割を果たしたという点にある。例えば、『英雄崇拜論』の翻訳出版後『神曲』の翻訳が出版されるまでに、ノルトン著柏井園訳『ダンテ研究』（明治39年）、チンスモア著住谷天来訳『ダンテの教訓』（明治42年）などの大部な研究書が先行して刊行されている。おそらく、カーライルの『英雄崇拜論』を通して、過酷な運命に不屈の精神で立ち向かった「英雄ダンテ」というイメージが広がり、ダンテの伝記への関心を掻き立てたことに起因するのではないかと考えられる。

カーライルの『英雄崇拜論』が翻訳されたのと同じ頃、「英雄ダンテ」像を提示したカーライルの紹介者である植村や巖本の周りには、彼らよりも一回り若い世代の青年が集まり、新たな文学の可能性を求めて動き出そうとしていた。そのメンバーは、巖本善治が明治女学校の教授に引き入れた星野天知（1862-1950）を中心に、『女学雑誌』に「厭世詩家と女性」を寄稿した北村透谷（1868-1894）、星野が巖本に明治女学校の教員に推薦した島崎藤村（1872-1943）、星野と交流のあった平田禿木（1873-1943）といった青年文学者達で、植村や巖本らの道德主義的文学傾向から離反し、明治26年1月に新しい文芸雑誌『文学界』を立ち上げた<sup>10</sup>。のちに、同人には禿木の第一高等学校での一年先輩にあたる上田敏（1874-1916）も合流する。

かれらは、文学に道德性を求める功利主義的文学観に対抗して芸術至上主義を掲げ、専ら審美的観点から泰西の文学に接近し、来るべき時代の新しい文学の創造にそのエッセンスを取り入れようと考えた。ルネサンス芸術やダンテに対する関心はその一端を示すものであり、『文学界』同人にとっては、ダンテの伝記的事実よりはダンテの詩作品こそが興味を惹かれる対象であった。柳村（上田敏の筆名）「美術の翫賞」（29号）、早川漁郎（戸川秋骨の筆名）「文学復興期の事を想ふ」（33号）、上田敏「ダンテ、アリギエリ」（34号）、平田禿木「ベアトリチエ」（36号）、荒川漁郎（平田禿木の筆名）「ダンテが後年の事を記す」（45号）、平田禿木「神曲余韻」（53号）、荒川漁郎「以太

---

<sup>10</sup>『文学界』創刊にかかる経緯は、星野の日記（日本近代文学館:1997）に詳しい。

利に於ける神曲註疏の事を記す」(56号)といったダンテ関連の文学論や翻訳が次々と『文学界』の誌面を飾り、悲恋の詩人ダンテという側面が強調された。上田敏が明治34年に上梓した『詩聖ダンテ』は『文学界』から生まれたダンテ研究の到達点であると同時に、「詩人ダンテ」像の確立という点でエポックメイキングなものとなった。

この時期の大賀がカーライルや『文学界』にどの程度親しんでいたのかは資料がないため何も言えない。ただ、ダンテに私淑する契機となったのが他ならぬ上田敏の『詩聖ダンテ』であったことを考えると、大賀のダンテ観も上に述べたような時代の流れの影響を多少とも受けていることは間違いないであろう。

### 3. 大賀壽吉のダンテ観

大賀のダンテ論を読むと、その根底にあるダンテ観は、明治20年代半ばに青年の心を魅了した「英雄ダンテ」像とも、明治30年代に上田敏を嚆矢とし芸術至上主義を掲げた『文学界』同人が作り上げた「悲恋の詩人」像とも、少々異なる独自のものであることがわかる。

「人々に真の誠と自主独立の精神を説いた作品」(川戸1995:352)たる『英雄崇拜論』におけるダンテは、「天才の主格は熱心(Intensity)と熱心に属する処の者に在り」(カーライル1894:35)というように、とりも直さず、強烈な意志に貫かれた人間として提示されている。一方、大賀も「其苦き運命と之と戦ひたる勇氣とに於て、ダンテに比すべき者はない」(大賀1917d:39)とは言うものの、後述のように超然と運命に逆らう強者というよりは、むしろ喜怒哀楽の激しい血の通った人間として捉える傾向が強い。

また、大賀にとってダンテは単なる詩人というわけでもない。たとえば、「史伝 青春のダンテ」で大賀は、「彼は単に其時代の生活を歌ふた詩人ではない、偉大なる哲学者であり、預言者であり詩人であつて、此三者が渾然として融合せる所に彼の偉大がある」(大賀1915b)と述べているように、詩人というのはダンテという人間の一つの側面でしかなく、ダンテは詩人の枠に留ま

らないと考えていた。これは、全人的にダンテを捉えること、統一体としてのダンテという人間のあり方を示すことが最も重要であると言いかえることができる。しかし全人的なダンテという捉え方は、「英雄」「詩人」といった言葉では的確には伝わらない。そう考えた大賀が思いついたのが「レイマン」(平信徒)という言葉であった。

ダンテは当時の人に詩人として尊敬を受けたのみならず、神学者として、哲学者としても尊敬された。ラファエレがヴァチカノの壁画にダンテを此三者として書いたのは、我等に愉快的な感じを与ふる、ダンテが詩人であり、兼ねて哲学、神学に通じて居たといふことは別に注意を惹くほどのことではないが、彼が恐くは其名を永しへに遺すべき著作を為し得る程の教養を有して居た最初のレイマンであつたことは見逃すべからざる事実である。(大賀 1919 : 13)

この「レイマン」という言葉は、「英雄」とは正反対のイメージを喚起する。大賀があえてこの語を選択したのはいかなる理由によるのであろうか。そのヒントとなるのが、「中世時代とダンテの一生 (ダンテ研究緒論)」において、ダンテの一生涯を評して述べた次のくだりである。

ダンテ五十六年の一生は失敗に終わったのである。実に彼の一生は悲劇である……十九年の長き年月を漂零生活に送りて他国に客死した。大失敗、大悲劇といふべきであるが、由来大成功は大失敗より来る。(大賀 1917d:52)

つまり、大賀の共感を呼び覚ましたのは、失恋、追放、貧困、孤独の人生を超人的な不屈の精神で乗り越えたダンテの力強さというよりは、流離放浪の境遇にあっても信仰を失わず希望に生き、常に最善を尽くさんと努力した「レイマン」の健気な姿であったということができる。

『神曲』はそうした「失敗」の人生を送ったダンテが、個人的経験を元に深い思索と探究と信仰を経て、人間と世界の在り方の理想を表現したものであるがゆえに、「その詩風の雄大その音楽の崇麗他に類なき強さではあらうが」、「彼が人生日常の経験を捉へ来つて之を靈化し聖化し自己の靈的要求によりて之を解決した点即ち自己の強大な個性を中心として一天地を創造した所」（大賀1921）を評価しなければならないと考えた。つまり、『神曲』は「単に宗教や道徳を説き、政治を論じ、或は芸術をうたふのではなくして」「これらのものが凡て渾然として融合して居」るので、『神曲』を理解するには、「ダンテが人生に就て如何なる理想を有し、如何なることを教へたかを見出すことが重要になるというのである（大賀1922b:39）。

大賀が、ダンテの理想をどのように捉えていたか。それを解く鍵が『帝政論』第1編4章にある。大賀はその思想の核心を次のようにパラフレーズしている。

人の終極の目的は其才能を凡て完全に発達せしめて、人類全般の幸福の爲に之を最も能く活動せしむるにある而して此目的は世界に平和なくしては達せられぬ。（大賀1915a、下線は筆者）

大賀はこれをダンテの思想の神髄と見て、最も重要視した。大賀が再三にわたり微妙に表現を変えながら、この内容を引用していることから、それは明白である（大賀1917b:83;1920:45,48；1922a:68）。

ということは、大賀の言う「レイマン」の生き方とは、この理想に私淑し、日々の生活においてこれを実践していくことに他ならないであろう。カーライルの描いた「英雄」像は確かに人の心を揺さぶるだけの力がある。しかし、ただ崇拜するだけでは、創造的な生き方を生み出すには至らない。盲目的に従うことは、決して主体的な生き方にはならないのである。

私が何故にダンテを説くかといへば、<sup>カルチャー</sup>修養を思ふからである、修養の必要なることはいふ迄もないが、然らば如何にして之を実行することが出来るかといへば、たゞ物理学や化学などの科学を研究しても其目的は達せられぬので、これには誰も異存はないのである。蓋し修養の方法としては、日夕偉大なる詩人に親炙して、彼等の理想を会得し、之を我等の日々の生活に実現せんことを試むることが最善である。(大賀 1917d: 37)

ダンテの理想、其強健なる意志、世界的の見地、一個のレイマンとしての宗教的実験、これ皆我が国今日の青年に鼓吹するを要する。これ老生が敢て不才を顧みずしてダンテを叫ぶ所以である。(大賀 1916:47)

このように、大賀がダンテを鼓吹したのは、ダンテを神棚に祀るためではなく、ダンテのような理想を掲げて全力を尽くすことによって、自分と自分を取り巻く周囲の人間の幸福を追い求めていくことこそが人生の目的なのだと思ふがゆえであった。そこには、自身が「レイマン」としての生き方を貫いてきたことの自負と、その正当性をダンテという偉大な人物に見出したことの自信が色濃く反映されていると見ることができよう。

#### 4. ダンテの大衆化に対する批判

先にも述べたとおり、大正4年から大正10年にかけては、わが国でダンテ・ブームが巻き起こった類まれな時期である<sup>11</sup>。その結果、ダンテの大衆化とも呼ぶべき状況が到来し、前後の期間も含めて全国各地で講演会が開催され、活字メディアにはダンテの文字が頻繁に登場するようになった。たとえば、大正3年から昭和4年までに刊行されたダンテに関する図書は、単行本

---

<sup>11</sup> たとえば、大正10年9月に大阪朝日新聞社が主催したダンテ没後600年を記念する講演会には「申込殺到千五百名余に上り当夜六百余にて閉場」(木村1954:80)したという。今日では想像だにできない前代未聞の事態である。

に限っても、『神曲』の翻訳だけで7種<sup>12</sup>、詩集が5種<sup>13</sup>、『神曲』の梗概本・解説本が5種<sup>14</sup>も出版されている。

ところが、そのほとんどが既存の訳の使い回しであったり、杜撰な翻訳であったりした。翻訳というのは単に言葉を移し替えればよいわけではなく、「その書き直すうちに原著の意を解釈するといふことをも含めるものである」（大賀1917c:48）と考える大賀にとって、このようなブームにあやかっただんての大衆化は決して好ましいものには映らなかった。山川に宛てた手紙には、その正直な気持ちが表現されている。

我国にも此頃は折々ダンテに関するものの刊行せらるる様に相成り感謝にたえざる事ながら、さて其内容を見れば腹立たしくもあり、なさけなくもありといふ次第なるは残念に存申候（木村1958：89、昭和2年11月13日付）

具体的な例を挙げると、たとえば大正5年刊行の古典文学研究会訳について大賀は次のように述べている。

---

<sup>12</sup> 詳細は以下の通り。①山川丙三郎訳『神曲 地獄』（警醒社書店、大正3年11月）、『神曲 浄火』（同、大正6年5月）、『神曲 天堂』（同、大正11年3月）、②古典文学研究会同人訳『神曲』（向陵社、大正5年12月、古典叢書）、③中山昌樹訳『神曲 地獄篇』『神曲煉獄篇』『神曲 天国篇』（洛陽堂、大正6年）、『神曲』（新生堂、大正13年、ダンテ全集第1-3巻）、④上田敏『ダンテ神曲』（星野敬一、大正7年7月）、⑤竹友藻風訳『神曲上 地獄界』（文献書院、大正12年5月）、⑥河原萬吉ほか訳『神曲』（万有文庫刊行會、大正15年12月、万有文庫第1巻）『神曲（天国篇）詩集・新生』（同、昭和2年5月、万有文庫第2巻）、⑦生田長江『神曲』（新潮社、昭和4年8月、世界文学全集1）。

<sup>13</sup> 詳細は以下の通り。①中山昌樹訳『ダンテ詩集 新生』（洛陽堂、大正6年）、『新生・詩集』（新生堂、大正14年1月、ダンテ全集第4巻）、②石躍信夫訳『ダンテの詩集』（崇文館書店、大正12年）、③久保正夫訳『ダンテ詩集』（越山堂、大正12年2月）、④平林初之輔訳『新生』（文明書院、大正13年）、⑤松山敏訳『ダンテ詩集』（文英堂出版、大正14年、世界名詩選2）、『ダンテ詩集』（新時代文芸社、大正14年、世界詩人叢書5）、『ダンテ名詩小曲集』（緑蔭社、大正15年10月）。

<sup>14</sup> 詳細は以下の通り。①生方敏郎編『神曲』（読書會、大正3年、赤門叢書第2編）、②高月藹之助著『神曲物語』（河野書店、大正3年9月、世界名著物語第15編）、③村上静人編『神曲』（赤城正蔵、大正3年10月、アカギ叢書第27編）、④森田草平編『神曲』（日月社、大正3年10月、現代百科文庫1）、⑤蘆谷蘆村著『こどものダンテ』（日曜学校文学部、大正14年11月）。

言語同断のものにて多分ケリーの英訳を一寸読みたる位の連中なるべく『地獄』は貴下の訳を口語体にくづしたるものかと思われ申候連も真面目にダンテを研究した人の訳には無之小生はダンテに対するぶじょくと存申候事に御座候（木村 1958:73、大正 5 年 12 月 30 日付）

旧臘向陵社から発行したる古典文学研究会員の訳にかゝる神曲の如きが、此売んかなの部に属するものであるかに余には見ゆるのである、実は日刊新聞に其広告を見て一本を取寄せ、転宅の取込中ながら寸間を盗んで十数頁を通読したが、余は泣いたのである、嬉し泣きではなく、訳が余りに杜撰なので悲しくもあり残念にもあり、ダンテに対する侮辱であると感じたからである。（大賀 1917a:71）

大正 15 年刊行の万有文庫版についても、

『万有文庫』の神曲、新生及び詩集の訳、これは己刊の日本訳をくづしたるものなるべく、ダンテを全く台なしにいたし申候（木村 1959:89、昭和 2 年 11 月 13 日付）

文には随文大層なる事を記し居れるも中山氏の訳を失敬したるものなることは明白に御座候（木村 1959:88、昭和 2 年 6 月 6 日付）

と手厳しい。

拙速な訳業は研究とは程遠い「文筆労働者」（木村 1959:88、昭和 2 年 6 月 6 日付）のやっつけ仕事であり、ダンテ文学の本質の理解に至るべくもない。質の悪い翻訳の流布は、ダンテ文学の本質を理解するにあたり無益どころかむしろ有害である。欧米では一生涯を『神曲』の研究に捧げる学者もいるというのに、何たる違いであろうか。まして、イタリア語を母語とせず西洋古典文学の理解も覚束ない東洋の島国の人間がちょっと勉強した位では

齒が立たないというものであろう。ダンテの文学の深奥に迫るには、「先づ神曲を原文又は訳文にて読むことが第一であることはいふ迄もない」（大賀1916:42）のであって、そのためには膨大な時間と労力がかけられてしかるべきである。大賀はそのように考えていた。

こうしたダンテの大衆化の潮流に対抗し、真摯な態度でダンテの研究に取り組んでいると大賀が認めていたのは、原典イタリア語からの翻訳を進めていた山川丙三郎と中山昌樹（1886-1944）だけであった。実際、大賀は、二人に対してだけ文献の提供や訳書の巻末に附した文献案内の執筆などの形で支援を行っている。

とはいえ、中山訳に対する評価は相当厳しいものであった。「早々にやり上げたる精力にはおどろき」とは言いつつ、「効を急ぎて充分に研究せず、半可通の訳をなせし為」、「百ヶ処計りの誤り」（木村1954:76、大正7年2月20日付）、「つまらぬ誤が所々に有」（木村1954:77、大正7年7月28日付）等々、全くと言ってよいほど肯定的な評が見られない<sup>15</sup>。中山も自分の翻訳の欠点は重々認識しており、大賀の指摘に反論するつもりはまったく持っておらず、真摯に大賀の意見を聞き入れていることを考えれば<sup>16</sup>、こうした辛辣な言葉は少々気の毒にさえ思えてくる。

もっとも、大賀と中山では翻訳に対する考え方が違っていたため、このような評価になるのは避けられなかった。大正13年9月聖心女学院にて講演のため大賀が上京した折、中山と面会した際の様子を伝えて、大賀は山川に次のように報告している。

同氏と小生とでは立発点を異にせるがため意見の一致は不可能に御座候。同氏は『ダンテ全集』の如きは不完全でも早くといふ考へ、小生はかゝ

---

<sup>15</sup> ほかにも大正6年5月16日付（木村1954:73）、大正8年6月23日付（木村1967:91）、大正11年11月17日付（木村1958:132）、大正13年10月11日付（木村1967:104）の書簡を参照。

<sup>16</sup> 「次に「新人」三月号に寄せられたる大賀氏の紹介批評は同氏の立場としては確かに正当なものであらうと思ふ。……又出版後も原詩及び英独仏訳を参照して精密な意見を記して寄せて下さるので何とも感謝に言葉なき次第である。……自分の訳に対する同氏の意見批評に対しては何も云ふことがないのであるが……」（中山1918:48）。

る偉大なる作品はよし百年を費すともおそからず及ぶ丈けの研究を積み  
てこそ原著者に対し又読者に対する誠意を尽したりといふべしといふ考、  
不幸にして合致し難く候も小生は幸に手伝ふべき事あれば喜んで応ずべ  
きよし同氏の請に答へ申候（木村 1967:105、大正 13 年 10 月 11 日付）

一刻も早く日本にダンテを普及させたいと願う中山に対し、大賀は、急ぐ  
ことはない、たとえ膨大な時間をかけてでも誠心誠意取り組むべきだと説い  
ているが、二人の話は平行線を辿る。それでも大賀は、いろいろと訳文の不  
備は指摘しても、根底において中山の訳業を否定することがなかった。それ  
は中山が原典を重要視するという基本姿勢を共有していたからである。だか  
らこそ、大賀は考え方の違いを超えて支援の手を差し伸べようとしたのであ  
る。

## 5. 大賀壽吉の山川丙三郎への評価

大賀の山川訳に対する評価は中山訳の評価とは好対照である。まずは、以  
下に大賀が山川に書き送った手紙から該当箇所を抜き出してみる。

謹厳なる文章、而も平易にして解し易く訳され候御手並ただただ感服の  
外なく我国にかかる良訳の出でたるは心強く御座候（木村 1954:73、大  
正 6 年 6 月 8 日付）

忠実なる而して充分にダンテを了解しての翻訳は我国にては愛兄を除き  
ては為し得られまじく候（木村 1954:75、大正 7 年 2 月 20 日付）

殊に難訳の『天堂』をかくも明瞭に御訳しなされ候御事御熱心なる御研  
究の結果とただただ敬服仕候事に御座候（木村 1954:82、大正 11 年 2  
月 27 日付）

前二篇に比して大に円熟せるは筆致誠に嬉しく存申候かかる難物をかく迄に訳しなされ候御苦心に対しては心からの感謝を捧げ申候（木村 1954:83、大正 11 年 4 月 14 日付）

翻訳といへば我国にては一向にわけもなきものゝ様に思ひ居る人多きやに相見へつねづねざんねんに存じ居申候に、大兄の如き敬虔なる態度にて原文に対せられ一字の訳もゆるがせに為し玉はざるありて、出すぎたる申条ながら大に意を強ふし、大兄に対しては多大の尊敬をいたし申候事に御座候（木村 1967:94、大正 12 年 3 月 7 日付）

真にダンテへ敬慕の至情からの訳出なき我が国にては貴訳の如き一日も早く公刊被遊度存候事に御座候。先づ老いたる親の孫の誕生を待ちこがるゝ心地とも可申か。……尤も御訳文は失礼ながら今一層御精練被遊度存候。今日の貴訳にても『地獄』と『天堂』とは後者非常の御進歩と存居申候（木村 1967:108、大正 15 年 10 月 5 日付）

私信ということもあり、このように山川の翻訳に対する大賀の賛辞は最高級の言葉が並んでいる。次に引用するのは、『神曲』邦訳のレビューである「ダンテ『神曲』の邦訳を読む」「再び『神曲』の邦訳に就いて」からの引用であるが、基本的にその調子は私信におけるものと変わらない。

即ち前にいへる如く山川丙三郎氏の神曲完訳は四年前に其地獄篇が出版され、本年に入りては中山昌樹氏の地獄、煉獄の両篇が出で、本月中に天堂篇が出でゝ完成を告ぐるとのことである。余は両氏に向て満腔の感謝を捧げ、尚ほ山川氏の早く其訳を完成せられんことを切望し、而して両氏の訳本が広く行はれて、幾度となく版を重ね、其改版毎に訂正を加へて、永く遺るべく訳本と為されんことを希ふて止まぬ。全体翻訳は或る意味に於ては著作よりも困難なる事業であつて、殊に詩の翻訳は不

可能といふも過言ではない。而も山川、中山の両氏が我国に於て初めて神曲を訳するの難事業に当たられたのは余が衷心から感謝する所で、我国は今両氏の努力によりて初めて神曲の完訳を有するの誇を得たのである。(大賀 1917b: 87)

山川氏は篤実なるダンテ研究者で、今は神曲の翻訳に全力を注ぎ、一篇の翻訳にも少なくとも二三年の時日を費し、十分に研鑽推敲を経て之を公にせらるゝことなれば、其訳の信頼すべきは固より、訳文謹厳にして平易、而も冗長に流れざるは流石に多年の丹精とうれしく思ふのである。余は同氏の浄火篇は未だ精読の機会を得ざれども、余が中山氏の訳について注意したる個所を対照するに、二三の外は余の意見と符号せるを見て心強く感じた。(大賀 1917c: 50)

こうした引用を読むと、拙速に走ることなく、丹念に文献学的な研究を積み上げ、訳語を一つ一つ丁寧に決めていく山川の姿勢に、大賀が深い感銘を受けていたことが分かる。

これ以外にも、山川の『地獄』訳刊行後から『新生』訳刊行の時期に亘る数年間に大賀が山川に書き送った手紙には、実直な姿勢で翻訳に取り組む山川を自らの知識と蔵書により全力で支援しようとする大賀の熱意が満ち溢れている。行間から読み取れるのは、大賀にとって山川への支援は「其才能を凡て完全に発達せしめて、人類全般の幸福の為に之を最も能く活動せしむる」というダンテの理想のまさに実践であり、人生を賭した一大事業であったということである。山川と大賀、いずれも一人だけではこの大事業は完遂し得なかった。それぞれが、個性と才能を十分に発揮し、分担、協力し合うことで初めて可能となったとすることができよう。

最後に、大賀が山川と交流を持つきっかけとなった大賀による『地獄』訳の書評の全文を掲げておく。そこには、大賀の山川に対する熱い敬愛の念が言葉の端々に滲み出ている。貧乏に打ちひしがれながらも、ただダンテを訳

したいという熱望と使命感だけを頼りに孤独な仕事に取り組んでいた山川が、この書評を読み、同時代の日本に理解者がいることを知り、どれほど励まされ助けられたかは想像するに余りある。

### 山川丙三郎氏訳神曲第一篇地獄

神曲が世界文学の秀逸なるもので、その「簡勁雄大の詩風、荘嚴瑰麗の音楽、幽遠熱烈の文致、天堂、浄罪、地獄の三界を通じて、人類の千載にして始めて得る妙音のよみわたれる」<sup>17</sup>は今更いふを要せぬ。吾人基督者がことに神曲に興味を感じずるはそがダンテの吾人に遺したる自らの尊き姿であるからで、換言すれば神曲はホーマーの詩や、沙翁の戯曲と異なりて、ダンテのクリスチヤン基督者としての靈的実験を記したもので、こゝにこの偉大なる平信徒の人格が刻附けられ、其深遠なる思想が鑿ちりばめてあるが故である。実にダンテはフォスレル<sup>18</sup>がいへる様に隠者でもなく、専門の神学者でもなく、唯一介の世俗の人で、当時の社会生活を為して、而も其生活の意義を自らの基督教の信仰と靈的実験とに見出したもので、この意味に於て彼はたしかに基督教の最も完全なる代表者である。

翻訳の難きは著作の難きに優るものがある、内容外観が渾然として一致し、深刻なる声調に深遠なる思想を表はし、「押韻拗音の間いふべからざる妙趣」<sup>19</sup>ある神曲を我国語に訳するが如きは至難中の至難なるもので、翻訳はナスエンチャントメントなりと謂るの至理なるを感ぜざるを得ぬ<sup>20</sup>。而もダンテの

---

<sup>17</sup> 上田敏『詩聖ダンテ』からの引用。正確には、末尾が「妙音のとよみわたる」となる（上田1901:54）。

<sup>18</sup> Karl Vossler (1872-1949) はドイツ人のロマンス語学者。ベネデット・クローチェの親友。旭江文庫蔵書で、これ以前に刊行されたVosslerの著書には2点があるが、ここのVosslerへの言及とは直接関係がない。むしろ、この記述は、前年に出版されたPhilip H. Wicksteed著 *Dante & Aquinas* (1913) からの孫引きと推測される。“The German Dantist Karl Vossler claims Dante as the most perfect representative of Christianity that history can point to on the very ground that he was neither a recluse nor a professional theologian, but a man of affairs, who lived the full life of his age and found in his Christian faith and his spiritual passion the very centre of its significance.” (vii)

<sup>19</sup> これも上田敏からの引用（上田1901:55）。

偉大なる人格をうつし出さんには訳者がダンテの靈的実験を了解し、之に共鳴する所のものを有して居らねばならぬので、基督教の了解されぬ我国に於て今日迄神曲の訳なかりしは故なきにあらず。今日と雖も我国に於て真面目にダンテを研究しつゝある人は恐らくは隻手の指を以て数ふる程であらう。ダンテは輕佻な文学や断片文学に酔へる人達に了解さるゝには余りに深淵である、余りに偉大である。

吾人は一兩日前に山川丙三郎氏の訳にかかる神曲第一篇地獄界を入手していひ知らぬ喜びに溢れたものである。嘗に訳者が我国に於ける神曲全訳者の第一人たるの榮譽を得られたるを祝するのみならず、我国文学界、將た宗教界の為に大に祝せざるを得ぬ、吾人は知人に訳者を知れるものありて、訳者が篤学クリスチャンの基督者にして、予てダンテを研究し、神曲を翻訳さるゝことを承知せるが、今本書に接して訳者が真面目なるダンテ研究者であり、主張ある人物であることを知りて、衷心より本書を広く世人に推奨することを得るのを喜ぶのである。

本書はライン、フォア、ラインの直訳といふべきもので、往々神曲を始めて読む人には了解し難かるべしと思はるゝ個處あるも、こは止を得ぬことである、而して直訳とはいひながら其文は余程精練された者で、ダンテの詩の生命なる簡勁を保有して居る。地獄界の二絶唱と言ふゝ第五歌の婉美たとしへなき、フランチェスカの悲恋物語、第三十三歌の世にも珍らしきウゴリノ伯の惨話の如き迎も原詩の妙趣を伺ふは不可能なれど、よくもかく迄に訳されたり、第三歌地獄門上の銘の如き、数多き英仏独の訳書中にも満足なるはなしといはるゝもの。我国語訳に今これ以上は求め難かるべし。而して訳者は卷末百二十余頁に亘りて六号活字にて組める精註を附せるが或は異本に

<sup>20</sup> Marvin Richardson Vincent著 *The Divine comedy of Dante : the Inferno* (1904) に次のようなくだりがある。"I have made a literal translation, and have not attempted to produce a smooth and elegant English poem. Such an attempt will inevitably land any translator in florid paraphrase. One who studies the *Commedia* only through the medium of a translation, must be content with a partial impression of its beauty, grandeur, and power. At the very best, translation is "disenchantment"; but certainly the spell will not be restored by rhetorical amplifications, by diluting Dante's thought into conventional commonplace, or by emasculating his vigorous diction to meet the demands of conventional propriety. Literal translation will confront its readers with not a few novel, startling, and occasionally disagreeable forms of expression. For these, Dante, and not his translator, must be held responsible." (vii)

よれる訳を加へ、或はムーア<sup>21</sup>の著書の如き専門家とも云べき人ならでは読ざるものゝ説を引用せらるゝより見れば訳者多年の研究の結果なるは疑ふべくもあらず。第一歌百五行のフレルトロ、第七歌一行のパペ、サタン云々の如きもくくだしき説を掲げず、単に意義不明と記されたるは訳者が主張ある人なることを示せるものといふべし。第五歌百二十三行汝の師をキルジリオと解して、ボエチウスと解するの説を省かれたる亦訳者の主張を見ることが出来る。然しながら吾人は訳者の個人性が余りに表れ過ぎたかと思ふ節なきにもあらず。そは序文として新井氏なる人<sup>22</sup>の抜粋文を掲げられたるが如き其の一例であらう。此文は初めに奴隸云々の文字あつて地獄界の関連あるやに思わるゝも、神曲の序文として適当なるものであらうか疑ひなきを得ぬ。訳者が之に代へてダンテの小伝、神曲の総論といふべきものを巻頭に載せられたらばと吾人は遺憾に感ずる、又ダンテの肖像も原画を滅したと云るゝマリニーの補筆せるもの<sup>23</sup>よりもアルンデル、プリント<sup>24</sup>を写されたらばと思ふのである。尚吾人愛書家にとりては用紙、印刷、装幀に今一際の注意が望ましいので、三篇の翻訳完結の上はダンテの名にふさはしき製本として刊行を切望にたえぬ。細評は他日精読の上之を試むることあるべく、今は唯本書を紹介するに止む。(十二月四日)

(初出『基督教世界』1629号、大正3年12月10日付)

---

<sup>21</sup> Edward Moore (1835-1916) はOxford版ダンテ作品集の校訂者として著名なイギリス人ダンテ学者。

<sup>22</sup> 山川の師、新井奥遂 (1846-1922) のこと。

<sup>23</sup> ジョットがBargello Chapelのフレスコ画として描いたダンテの肖像に、Mariniという画家が1840年に手を加えたものを指している。

<sup>24</sup> The Arundel Societyが1848年から1897年にかけて蒐集した199点の着色石版画(chromolithographs)のコレクションである。ここでいうダンテの肖像は、ジョットの筆になるものを指す。Frank Jewett Mather, Jr. 著 *The portraits of Dante* (1921) に詳しい解説がある。

## <参考文献>

※本論の執筆にあたり引用・参照したものを以下に掲げる

※テキストからの引用にあたり、明らかな誤植は訂正した

- ・MaCaulay, T. Babington (1877). *Milton : an essay*. Tokio.
- ・Oga, Jiukichi (1929). *A Dante bibliography in Japan*. Osaka, Printed for Private Circulation.
- ・Oga, Jiukichi (1930). *Bibliografia dantesca giapponese*. Firenze, L.S. Olschki. 2a ed., riv. e corr.
- ・上田敏 (1901). 『詩聖ダンテ』. 東京、金港堂.
- ・植村正久 (1966). 『植村正久著作集第3巻』. 東京、新教出版社.
- ・生地竹郎 (1976). 「ミルトン」『欧米作家と日本近代文学5』教育出版センター、9-40.
- ・大賀壽吉 (1915a). 「ダンテの帝政論」『大阪朝日新聞』(12008)、7月4日付.
- ・大賀壽吉 (1915b). 「史伝 青春のダンテ」『基督教世界』(1661)、7月29日付.
- ・大賀壽吉 (1916). 「ダンテを研究せんとする人々へ」『新人』17 (8)、41-47.
- ・大賀壽吉 (1917a). 「友に与えてダンテ研究の勃興を喜ぶ」『新人』18 (2)、71-76.
- ・大賀壽吉 (1917b). 「ダンテ『神曲』の邦訳を読む」『新人』18 (3)、81-90.
- ・大賀壽吉 (1917c). 「再び『神曲』の邦訳に就いて」『新人』18 (7)、47-52.
- ・大賀壽吉 (1917d). 「中世時代とダンテの一生 (ダンテ研究緒論)」『新人』18 (8)、37-54.
- ・大賀壽吉 (1919). 「近代思想に於けるダンテの感化」『開拓者』14 (10)、81-88.
- ・大賀壽吉 (1920). 「もしダンテ今あらば」『開拓者』15 (5)、44-48.
- ・大賀壽吉 (1921). 「詩と漂泊の詩聖」『大阪朝日新聞』(14269)、9月11日付.
- ・大賀壽吉 (1922a). 「ダンテの「帝政論」と現代の平和運動」『開拓者』17 (1)、65-73.
- ・大賀壽吉 (1922b). 「神曲に取扱はれたる問題」『文明協会講演集』(1)、35-47.
- ・カーライル (1894). 『詩人的英雄』. 大阪、吉岡書店.
- ・川戸道昭 (1994). 「明治時代の英語副読本 (I)」『英学史研究』(27)、89-106.

- ・川戸道昭 (1995). 「トマス・カーライルと明治の知識人 「英雄崇拜論」の受容をめぐって」『英語英米文学』(35)、389-415.
- ・川戸道昭 (1997). 「明治時代の英語副読本(Ⅱ) 外山正一と東京大学刊行英語テキスト」『英学史研究』(30)、73-91.
- ・木村文雄 (1954). 「大賀寿吉氏の書簡 大正期ダンテ研究の一断面」『イタリア学会誌』(3)、72-85.
- ・木村文雄 (1958). 「大賀寿吉氏の書簡 大正期ダンテ研究の一断面 其の二」『イタリア学会誌』(7)、120-137.
- ・木村文雄 (1959). 「大賀寿吉氏の書簡(3) 昭和二年」『イタリア学会誌』(8)、82-97.
- ・木村文雄 (1961). 「大賀寿吉氏の書簡(4) 昭和三年から四年にかけて」『イタリア学会誌』(9)、76-95.
- ・木村文雄 (1967). 「大賀寿吉氏の書簡(5) 大正期の書簡・補遺」『イタリア学会誌』(15)、91-109.
- ・剣持武彦 (1964). 「ダンテ神曲と日本人との邂逅 明治期と大正期」『イタリア学会誌』(12)、101-110.
- ・剣持武彦 (1976). 「ダンテ」『欧米作家と日本近代文学3』教育出版センター、306-336.
- ・児玉実英 (1971). 「湯浅吉郎と英文学」『同志社女子大学学術研究年報』(22)、262-286.
- ・高橋光夫 (2010). 『山崎為徳の生涯』. 奥州、山崎為徳を顕彰する有志の会.
- ・中山昌樹 (1917). 「ダンテ「神曲」の翻訳に就て」『新人』18(4)、44-50.
- ・日本近代文学館 (1997). 『文学者の日記4 星野天知』. 東京、博文館新社. 日本近代文学館資料叢書.
- ・平川祐弘 (2010). 『ダンテ『神曲』講義』. 東京、河出書房新社.
- ・三上参次 (1908). 『外山正一先生小伝』. 三上参次.
- ・矢野峰人 (2007). 「『文学界』とダンテ」『矢野峰人選集第1巻』. 東京、国書刊行会.
- ・湯浅半月 (1926). 「新体詩の創作動機」『愛書趣味』(6)、1-5.

# 別 表

番号	論 題	掲載誌名	巻号、頁 または日付	名 義	内 容	備 考
<b>1913 (大正2) 年</b>						
1	ダンテと神秘家	新人	14(9):59-67	壽吉	研究	
<b>1914 (大正3) 年</b>						
2	山川丙三郎氏訳神曲第一篇地獄	基督教世界	(1629)	旭江	邦訳	
<b>1915 (大正4) 年</b>						
3	ダンテの帝政論	大阪朝日新聞	(12008)	壽吉	帝政論	
4	史伝 青春のダンテ	基督教世界	(1661)	漁史	生涯	
<b>1916 (大正5) 年</b>						
5	ダンテを研究せんとする人々へ	新人	17(8):41-47	旭江	研究	
<b>1917 (大正6) 年</b>						
6	友に与えてダンテ研究の勃興を喜ぶ	新人	18(2):71-76	漁史	神曲	
7	ダンテ『神曲』の邦訳を読む	新人	18(3):81-90	旭江	邦訳	
8	再び『神曲』の邦訳に就いて	新人	18(7):47-52	旭江	邦訳	
9	中世時代とダンテの一生 (ダンテ研究緒論)	新人	18(8):37-54	旭江	思想	
<b>1918 (大正7) 年</b>						
10	ダンテと聖書	大阪講壇	(208)	旭江	研究	
11	故上田博士の「神曲」の遺稿を読みて	新人	19(8):95-99	旭江	邦訳	
12	神曲の問題	新人	19(11):27-40	旭江	神曲	9の続編
<b>1919 (大正8) 年</b>						
13	パツセリニー伯のダンテ文庫に就て	新人	20(1):100	壽吉	その他	
14	『神曲』研究の大家ヴァーノン翁に就て	開拓者	14(7):58-60	旭江	その他	
15	近代思想に於けるダンテの感化	開拓者	14(10):81-88	旭江	思想	
16	近代思想に於けるダンテの感化 (二)	開拓者	14(11):12-25	旭江	思想	

番号	論 題	掲載誌名	巻号、頁 または日付	名 義	内 容	備 考
<b>1920 (大正9) 年</b>						
17	ダンテ記念館建設に就て	大正日日新聞	(80)	壽吉	その他	
18	もしダンテ今あらば	開拓者	15(5):44-48	旭江	帝政論	
19	近刊のダンテ図書に就て	あるの	1(1):11-25	旭江	研究	
20	登山者ダンテ	基督教世界	(1918):3-4		神曲	未確認
21	登山者ダンテ (二)	基督教世界	(1919):3-4		神曲	未確認
<b>1921 (大正10) 年</b>						
①	神曲の東洋的特質	開拓者	16(5):42-51	旭江	翻訳	原著者 Herbert Baynes
②	ダンテと其時代	新人	22(5):63-76	壽吉	翻訳	原著者 William Warren Vernon
22	詩と漂泊の詩聖	大阪朝日新聞	(14269)	壽吉	生涯	
23	ダンテの神曲	大阪時事新報	*1921.9.13-23?	不詳	神曲	
24	神曲の註疏について	芸文	12(9-10):538-561	壽吉	研究	未確認
25	日本に於けるダンテ文献	芸文	12(9-10):657-661	旭江	研究	未確認
26	ダンテ研究概況	芸文	12(9-10):661-666	旭江	研究	未確認
27	ダンテ研究概況	あるの	1(5):114	旭江	研究	『芸文』掲載の ものの異版
<b>1922 (大正11) 年</b>						
28	神曲に取扱はれたる問題	文明協会講演集	1:35-47	壽吉	神曲	講演の記録
29	神曲の意義	<i>Tsunobue</i>	2	不詳	神曲	誌名不詳
30	ダンテの帝政論と現代の 平和運動	開拓者	17(1):65-73	壽吉	帝政論	
<b>1923 (大正12) 年</b>						
③	ダンテの詩	哲学研究	8(11):1123-1155	壽吉、共訳	翻訳	原著者 Benedetto Croce
<b>1924 (大正13) 年</b>						
④	青年ダンテと『神曲』の ダンテ (一)	芸文	15(10):653-679	壽吉、共訳	翻訳	

番号	論 題	掲載誌名	巻号、頁 または日付	名 義	内 容	備 考
<b>1925 (大正 14) 年</b>						
31	ボッカチョとダンテ	芸文	16(8-9):517-529	壽吉	生涯	
<b>1926 (大正 15 = 昭和元) 年</b>						
32	ダンテの神曲	<i>Koso</i>	5-6	不詳	神曲	誌名不詳
⑤	ダンテの詩に就いて	芸文	17(6):353-379	壽吉、共訳	翻訳	上の続き
<b>1927 (昭和 2) 年</b>						
33	ダンテ伝説	The Muse	4:278-279	漁史	生涯	
34	ダンテとデモクラシー	関西日報	*1927.9.12-14?	不詳	帝政論	
<b>1928 (昭和 3) 年</b>						
⑥	ダンテ地獄篇 (一)	芸文	19(2):117-137	壽吉、共訳	翻訳	
⑦	ダンテ地獄篇 (二)	芸文	19(3):165-192	壽吉、共訳	翻訳	
⑧	ダンテ浄罪篇 (一)	芸文	19(4):240-256	壽吉、共訳	翻訳	
⑨	ダンテ浄罪篇 (二)	芸文	19(7):457-483	壽吉、共訳	翻訳	
⑩	ダンテの天堂篇 (一)	芸文	19(9):601-619	壽吉、共訳	翻訳	
⑪	ダンテの天堂篇 (二)	芸文	19(10):671-690	壽吉、共訳	翻訳	
<b>1929 (昭和 4) 年</b>						
35	ダンテの神曲について	<i>Osaka Rotarian</i>	(268)	不詳	神曲	誌名不詳
⑫	ダンテの詩の特質と単一	芸文	20(7):526-538	壽吉、共訳	翻訳	
<b>1930 (昭和 5) 年</b>						
⑬	ダンテ批評論の歴史的検討 (一)	芸文	21(2):125-153	壽吉、共訳	翻訳	
⑭	ダンテ批評論の歴史的検討 (二)	芸文	21(4):261-279	壽吉、共訳	翻訳	

注：

- ・旧字体は新字体に直した
- ・番号は論考等と翻訳で別の体系とした (○付数字が翻訳)
- ・名義：「壽吉」=大賀壽吉、「旭江」=大賀旭江または旭江、「漁史」=旭江漁史、「不詳」=筆者未見により確定せず、「共訳」=黒田正利と共訳
- ・配列は発表年代順となるようにしているが、中には正確な発行期日が確定できないものもあるためあくまで目安である